近畿支部

Computex Taipei 2017視察研修報告

近畿支部 支部長　松本 浩樹　　視察団長　内藤 富雅

日程：2017年5月31日（水）～6月3日（土）　参加者：7社15名、近畿支部事務局

はじめに

ComputexTaipeiはアジア最大級のICT関連の専門展示会で、今年は5月30日（火）～6月3日（土）の5日間開催されました。

近畿支部では5月31日（水）～6月2日（金）の2泊3日（実際は航空機の延着で3日（土）に帰国）で視察研修を実施いたしましたので報告いたします。

会場は大きく二つのエリアに分かれており、信義地区では世界貿易センターのホール１，ホール３、台北国際会議センター、南港地区では南港展覧館で行われ、26か国からの出展社数1,600社（5,010ブース）、来場者は13万人以上で、そのうち国外からのバイヤーは167か国から41,378名の登録があったということです。

今回は「グローバル・テクノロジー・エコシステムの構築」という位置づけで、「AI&ロボティクス」、「IoTアプリケーション」、「イノベーション＆スタートアップ」、「ビジネスソリューション」、「ゲーミング＆VR」を5つのテーマとして掲げ、イノベーションとスタートアップにフォーカスした「InnoVEXエリア」、IoTテクノロジーアプリ

ケーションを展示する「SmarTEXエリア」、Apple社のMFi認証製品を展示する「iStyleエリア」、オーバークロッキングやバーチャルリアリティーを展示する「Gaming & VR」の4エリアを新設し、これらに関連する製品出展及びイベントが行われました。

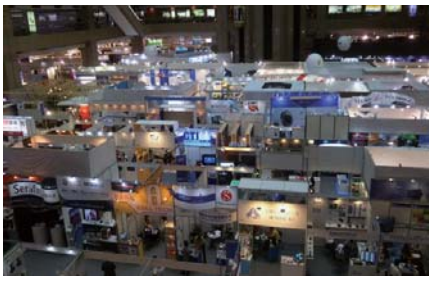
世界貿易センターに到着後、今年も台北コンピュータ協会（TCA）東京事務所の吉村氏に会場をざっとご案内いただきました。まず以下3つの見どころを紹介していただきました。①南港展覧館のGround Floorにある「TAIWAN EXCELLENCE」、「Best Choice Award」、「d&i Award」の三つのパビリオンに行き、出展社の中から選ばれた製品をチェックすること。②南港展覧館の4階SkyDomeでASUS、Acer、MSI等地元台湾企業や、Microsoft等大手企業の展示を見学すること。③世界貿易センターホール1の「SmartTEX」エリアでIoT関連の展示を見学すること。

Computexはハイスペック、高付加価値、最先端技術ではなく、ロースペックでもこれから日本や他国の企業と組んで何かを作り上げようという展示会であり、バイヤーは半年先に商品化されそうな物を見つけに来ていると解説いただいた。

展示会のトピックス

（参加者アンケートより抜粋）

世界貿易センターホール1



世界貿易センターホール1には「Smart-TEX」（ウェアラブル、セキュリティアプリケーション、車載電子製品、スマートソリューション、スマートホーム＆エンターテインメント等）最新のスマートテクノロジアプリケーションが展示されていた。

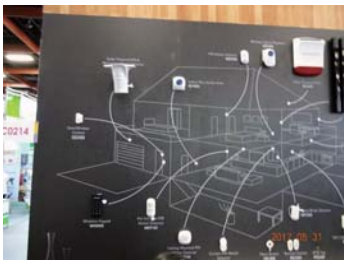
・ロボットの展示

ADATAのibotn、ASUSのZenbo、BanQのMiBot、DiBotなど多数展示されていた。利用シーンとしては受付～案内、接客、子供の遊び相手などが想定されているようだが、現状の利用シーンでは「ロボットの形にする意味があるのか」に疑問を感じた。

チェスを打つロボット

SMARTHOMEソリューション

日本国内のSMARTHOMEは、経済産業省主導でエネルギー軸での蓄、創エネルギーと、総務省主導でIoT軸での見守り等が主流であり、実現するための技術論が語られる場合が多いが、Computexでは既存技術の活用により、即市場に展開できるソリューションが展示されており、日本の技術を海外に、海外の技術を日本に、という関係は難しいと感じた。日本がガラパゴス化とならないかが懸念である。



・IoTソリューション

こちらの展示は日本国内と類似しているが、大きな違いはスタートアップできるスピード感にあり、日本ではアイデアを見せ、商品化に結びつけていく傾向にあるが、こちらでは既に動く形で見せていることに差を感じた。日本が製品化する時には既に海外では主流になっており、乗り遅れにならないかが懸念である。

世界貿易センターホール3

ホール3では「InnoVEX」スタートアップ企業による展示、賞金3万米ドルのピッチコンテスト等が行われていた。AI関連から自転車に取り付けるダイナモまで幅広い展示があった。

その中でこの三角柱構造の3Dプリンタ「FLUXDelta+」が目を引いた。機能・デザインとも優れており、Best Choice Awardの金賞を受賞していた。

「このような製品です。」「このようなことができます」と、一つの点を強調したデモが行われていたが、日本でも見ることができる技術であり、熱気は凄かったが特別興味を引くものはなかった。

こちらの会場でもAR/VRなどのキーワードを多く見かけた。

南港国際展覧館

南港国際展覧館ではiStyle（Apple社認証製品）、Gamin& VR、海外企業の出展が行われていた。

スカイドーム

・Microsoftブース

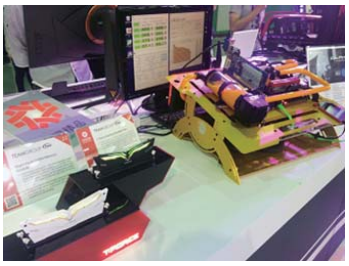
ブースに入るには提示されているQRコードからスマートフォンのブラウザの登録サイトでいくつか情報を登録する必要があり、面倒さに驚いた。

登録後にスマートフォンに表示されるQRコードをかざしてゲートをくぐると、2階に展示物が並んでいた。想像していたより

工場向けの振動から故障予測するクラウド(Azure)+IoTの展示や、AIでカメラ入力から顔を認識して年齢を推定するオーダーシステムがあり、WindowsやOfficeといったMicrosoftから随分変わりつつあることを実感できる展示だった。

・Gaming&VRエリア

七色に輝くファンやキーボード、毒々しい色の液体による冷却装置、特殊な形状のメモリモジュールを搭載したPCに衝撃を受けた。またテスラモーターズの電気自動車の展示もあり、自動車もコンピューター製品のカテゴリーの中に入ってきたという印象を持った。



グラウンドフロア

優れたデザインの製品に贈られる「d&i Award Pavillion」、台湾にて優秀と認められた製品を紹介するコーナー「TAIWAN EXCELLENCE PAVILLION」と、Best Choiceに選ばれた製品を紹介するコーナー「Best Choice Award Pavillion」があり、ここで目星をつけた上で、その製品の企業ブースへ移動し詳細を見て回るスタイルだった。

ただ残念ながら、南港展覧館ではあまり日本語は通じなかった。

まとめ

台北・桃園国際空港に到着後、展示会場に直行し世界貿易センターを視察しました。2日目は自由行動で、各自が興味のある会場を回りました。下記の感想が寄せられました。

- 今回、初めて海外の展示会を見学し、充実した展示会視察をすることができた。ブース内を見学していてもあまり声をかけてもらえない状況で、日本の展示会とは少し違った印象を受けた。言葉の壁は大きいものがあり、上手くコミュニケーションが取れず躊躇してしまう場面があったのが少し残念だった。今後グローバル社会になっていく中で、もっと勉強をしなければならないと痛感した。
- 今回、初めて海外出張で展示会訪問の機会をいただき、貴重な体験をさせていただいた。海外展開を考える中でコミュニケーションを取るため、英語はやはり必要だと認識した。
- 展示会視察においては英語でのコミュニケーションに対する自信のなさから、見るだけで終わる部分も多かった。詳細について深く聞くことができなかったのが残念であった。現地ガイドから台湾人の国民性を教えてもらった。台湾とのビジネスを行う際には、そのあたりに気をつけたい。
- 異なる国、文化での展示会を経験した結果、ITの世界は標準化がなされており、共通事項がとても多いと感じた。そのため大きな違和感なく各ブースを回ることができた。ただ、言葉が通じないという不便さを深く痛感した。今後のためにも語学について課題を感じた。熱気に触れ大いに刺激を受けたこと、グローバルな観点での経験が得られたこと、最終便の飛行機の欠航と、通常ではできない景観を積むことができた。
- IoT、Gaming PC、AIに関連するブースが多く見受けられた。またそれに関わる個々の部品を展示するブースも多数あった。特にGamingPC関連の製品(マザーボード、SSD、PCケース、GPU、モニター、マウス・キーボード等)がもっとも熱く注目を浴びているように感じた。組込みの世界とゲームが関連する印象はなかったが、今回の視察を通して組込みの世界とゲームを組み合わせることにより、より組込みの世界が広がるのではないかと強く感じた。
- 3日間という短い期間だったが世界が注目する展示会を訪れ、出展方法等も参考になるものが得られる貴重な場だった。スタートアップの重要性やエコシステムに仕立て上げる手法等、日本での感覚とは随分違いがあることが実感できた。これからも展示会で自社アピールに携わる際に参考になる多くのことを学ぶことができた。
- とにかく英語のコミュニケーション能力の低さを実感した。話す・聞くを重視していなかったためだが、Google翻訳アプリではまだ間に合わないため英語の学習が必要である。
- これまで国内におけるUSB PD対応はあまり注目されなかったが、PD対応のPC拡張カードや対応HUBの展示を見ていると、そろそろPD元年になりそうな気配を感じた。USB3.x対応については当面はHDMI⇔USB3.x変換デバイスがキラーアプリになる可能性がある。今回の視察は良い経験になった。

また参加者同士の懇親会では、意外に近いところで仕事をしている方がいたり、仕事以外の話でも盛り上がり楽しいひと時だったとの声がありました。今後の支部活動で再会の機会があれば幸いです。